

「間」の違い

筑波大学附属中学校 三年 鎌田 真衣佳

ご存知だろうか？ 間違いの意味は、大きく分けて二種類ある事を。一つ目は、事実と違い、誤りのあることだ。例えば私は、度々テストで答えを間違える。二つ目は、しくじりや過失だ。これは、失敗ともよく似ている。

私には、忘れられないしくじりがある。それは、とても暑い昼下がりのことだった。友人が電車の中で、私の注意を聞き入れず水筒を飲み始めた。私は苛立ち半分、おふぎけ半分で、その友人の頬を軽く叩いた。その時……友人の口から飲みこみ切れなかったお茶が溢れ、近くのご婦人にかかってしまった。思わぬ事態に頭が真っ白になった私は、謝罪の言葉を口にする友人の横で、黙って頭を下げた。

翌日私と友人は、生徒指導室に呼び出された。小学校の六年間、叱られたことは数え切れないが、生徒指導室に呼び出されたのは、それが初めて最後だ。学校に、苦情の電話が入っていた。電車内での飲食、ふぎけてご婦人にお茶をかけたこと自体も勿論だが、その後の私の態度が断罪されていた。

先生方や親からは、きちんと謝罪をしなかった態度についての方が、より厳しく注意された。当初はそれが、どうも腑に落ちなかった。母はそんな私に、お茶をかけた相手が、友人だったら、どうしていたかと問うた。

その問いに、私は明確に自覚した。それまで私にとって謝罪は、許しを請う行為でしかなかった。友人を怒らせたままでは、私の生活は一気につまらないものになってしまう。許して貰えないと困るから、必死に謝る。でも、お茶をかけてしまったご婦人には、恐らく二度と会うこともないだろう。許して貰えなくても、その後の私の生活に、さほど支障はきたさない。たとえ許してもらえなくても構わない。そんな思いから、謝罪を言葉にもせず、頭を下げるだけで済ませてしまった。

母は私に、世界は思いの外狭いと説いた。もしかしたらそのご婦人は、将来私が好きになる人の親戚かもしれない、と。人の縁は、どこで繋がるか分からないもので、迷惑をかけた方より、迷惑をかけられた方が、相手のことを忘れないのだ、とも。

そうでなくても、今はSNSなどで、容易に情報が拡散される。誰かの間違いが、あっという間に広まり、容赦なく叩きのめされる。

学校へ苦情の電話をかけたのも、ご婦人本人ではなく、同じ車両に乗車されていた方だそうだ。一体何人の人が、私の間違いを目にし、憤慨されたことか……私にはようやく、犯した間違いの大きさに打ちのめされた。学校への電話が、ご婦人本人からのものであったら、改めて謝罪が出来たが、現時点まで、その術は無い。その場で、心から謝罪しなかったことを、悔いても時既に遅しなのだ。

間違いは、誰でも犯す可能性がある。だから間違いを正し、繰り返さないようにすることこそが大切だ。謝罪は、間違いを正す第一歩でもある。迷惑をかけた相手だけでなく、その後の自分自身のためにするものでもある。私の間違いは、もはや正すことが不可能なまま、あの場にいた人々の中に残り続ける。

間違いの語源は、「間」が妥当、適当ではない、ということだともいわれる。だからこそ謝罪も、タイミングの「間」と、相手との関係性の「間」が肝心だと、身に染みている。

そしてそれは、謝罪を受ける逆の立場でも、わきまえるべきではないだろうか。著名人が間違いを犯した際に、記者会見などで謝罪する姿を見聞きすると、違和感を覚えることがある。誰に、何を謝罪しているのだろうか。オリンピックの代表にもなるような選手が、競技にも関係しない間違いで、競技から離れることが、何の謝罪になるのだろうか。

SNSなどによって、実際には遠く離れている人と人の「間」が、変に近いものと勘違いされているようにも感じる。誰かの間違いを、執拗に謝罪に追い詰めるような世論に、安易に加わることもまた、間違いだ。